

8月銅市況動向

世界的な景気減速懸念が重し

上旬に2年2か月ぶり安値

独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構(JOGMEC)がまとめた2019年の銅市況動向で、景気減速懸念と銅需要の弱まりを背景にロンドン金属取引所(LME)の銅相場は上旬に2年2か月ぶりの安値水準となった。

月初は5,876.0ドルで開始。1日、トランプ米大統領が第4弾の対中関税引き上げを9月に発動すると表明したことで、景気減速懸念が拡大。また、アルセロール・ミタルが2019年世界鉄鋼需要見通しを、1~1.5%増から0.5~1.5%増に下方修正したことで、銅需要減退が意識され、5日には2年2か月振り安値の5,647.0ドルまで下落した。

中旬は、ドル安の影響を受けて5,724.5ドルへと持ち直した後、5,700ドル前後で推移。ただ、15日と16日に韓国・釜山やオランダ・ロッテルダム等のLME倉庫で在庫が大幅に増加したことで、銅価格の上昇が抑えられた。

銅相場は、下旬に入ると下落基調に。米中貿易摩擦の

解決の糸口が見えない中、中国製造業の減速感で中国の銅需要減退懸念で緩やかに下げた。月末に一時上昇したものの、5,696.0ドルで月をまたいだ。

主要鉱山操業状況では、グレンコアが、コバルト価格の下落等を受け、コンゴMutanda鉱山の生産を年内に休止予定と7日に発表した。

関連情報では、ペルーエネルギー・鉱山省鉱業審議会がサザンカッパーのTia Maria銅プロジェクトの建設許可について最大120日間の一時停止を10日に決定。これに伴い、ペルー国家港湾庁は、翌11日に停止していたMatarani港からの銅精鉱輸出を再開したと現地でも伝えられた。コデルコは14日、チリ・チュキカマタ鉱山の坑内採掘を正式に開始と発表した。

アイバンホー・マインズは18日、コンゴKamoa・Kakula銅鉱床のポーリング調査で銅品位18%の銅鉱床に着鉱と発表した。今後、精度の高い室内分析を実施する予定。

動向に注視。

アルミニウム2次合金、同合金地金等生産実績は、前年比が7カ月連続マイナス。出荷が2カ月連続マイナス。今後マイナスが続くか、動向に注視。

アルミ輸出は、自動車需要から2次合金スクラップのみ増加。アルミ輸入は内需低迷から全品種減少。

【スクラップ景況予想】

前月に続き、流通在庫は販売価格の低迷、生産減、発生減から少ないのではないかと。

需要面に関しては足元の生産状況が徐々に悪化しており減少。

米中貿易戦争から不透明感が強くメーカーの購入意欲は低く、スクラップ販売は当面厳しい。

【LME・為替予想】

今月は米中貿易戦争の動向、香港デモの動向に左右される。

米中貿易に関しては、9月に米国との通商協議実施で調整と表明したが条件面で両者が折り合えとは考えにくくまだまだ悪化するのでは？

香港デモに関しては逃亡犯条例改正案の撤回を認めた中国政府だが、反対派が掲げる「五大要求」のうち、残る四つに習近平指導部が応じる可能性は低い。

これらを踏まえた7月のアルミ価格は1,700~1,800ドル。

スクラップ購入価格に関しては0円から-5円程度と予測している。

【「8月のアルミ概況および9月の見通し」終了】

銅・アルミレポート

橋本アルミ株式会社取締役

橋本 健一郎



8月のアルミ概況および9月の見通し (4)

【アルミ圧延・押出品生産数】

日本アルミニウム協会発表の圧延品の生産出荷動向によれば板類・押出生産合計は前年比+0.6%、17万5,764 t、19カ月ぶりプラス。

板類は10万7,579t、+1.4%、19ヶ月ぶりプラス。

押出類は6万8,172t、-0.6%、5ヶ月連続でマイナス。

【アルミニウム2次合金、同合金地金等生産実績】

前年比-1.1%、7万2,422 t、7カ月連続マイナス。

出荷は-0.8%、7万2,768 t、2カ月連続マイナス。

【輸出】

アルミ新地金が前年比-60.5%の150 t。二次合金が+15.5%の1,409 t。スクラップが+123.9%の1万8,257 t。アルミ缶が-10.2%の5,583 t。

【輸入】

アルミ新地金が前年比-12.4%の11万5,854 t。二次合金が-6.5%の10万9,521 t。スクラップが-66.6%の508 t。合金スクラップが-8%の3,445 t。

【見通し】

自動車は生産が-1.5%。国内販売台数が前年比+4%。生産は再びマイナス。生産はマイナスだが販売はプラス。今後注視。

アルミ圧延・押出品生産数は、板類・押出生産合計が19カ月ぶりプラス。今後更にプラスが続くか、

日刊金属

外電電信料
(税別)

6 カ月：42,000 円

12 カ月：84,000 円